

日本マレーシア研究会 関東地区例会報告レビュー

東南アジアのアラブ系移民の間における論争とイスラーム世界  
—1930年代前半における和解の試み—

山口元樹（慶應義塾大学大学院博士課程後期課程）

レビュー執筆者・久礼克季（立教大学大学院博士課程後期課程）

5月20日、立教大学において本年度初回のJAMS関東例会が行なわれ、山口元樹（慶應義塾大学大学院博士課程後期課程）により「東南アジアのアラブ系移民の間における論争とイスラーム世界—1930年代前半における和解の試み—」の報告が行なわれた。

本報告は、20世紀初頭東南アジア（シンガポールやジャワなど）のハドラーミー<sup>1</sup>・コミュニティにおいて従来禁止されていた預言者ムハンマドの子孫の一族であるアラウィー（バーアラウィー）の女性と一般ムスリムとの婚姻の問題からムハンマドの子孫の特殊性をめぐる、アラウィーとイルシャーディー<sup>2</sup>との間で起こった論争をとりあげたものである。そして、報告のなかで山口は、シンガポールで発行されたアラビア語定期刊行物やサラーフ・アル＝バクリー著『ハドラーマウト政治史』を史料として、1930年代前半の一連の論争における和解の試みをとりあげ、従来の先行研究では「東南アジアのハドラーミー・コミュニティ内部における主導権争い」とされてきた論争の再検討を行なった。

報告のなかで、山口は1930年代前半には2つの大きな和解の試みがなされたと指摘する。すなわち、1930年初めから1931年までのエジプト東方連盟の仲介による和解交渉と、1932年末から1934年までのイスラーム世界の指導者たちによる仲裁の試みである。このうち前者では、先行研究で指摘された面を反映したアラウィーたちの系譜の妥当性をめぐる議論がなされた一方、和解交渉の参加者や和解条件の内容に「ハドラーミー」「ハドラーマウト」の要素が薄く、和解条件ではアラウィーとイルシャーディー両派間の平等が第一に言及され、さらに和解の仲介を行なった東方連盟の仲介者がアラウィーたちの系譜の妥当性よりも“サイド”というラカブ（尊称）の問題を中心に扱うなどの傾向があり、これらから交渉では論争はあくまで「ムスリム全般にかかわる平等の問題」として扱われているという特徴がみられた。一方後者では、ラシード・リダーとシャキーブ・アルスラーンの2人が論争に対して具体的に言及し、彼らはいずれもアラウィーたちの系譜の妥当性についてイルシャーディー側でなくアラウィー側を支持するという判断を下し、アルスラーンは一連の論争についてイルシャーディー側の責任を重く見るという判断も下した。このような論争に大きな影響力を持った彼らイスラーム指導者たちの判断に対し、ハドラーミー・コミュニティの外部に存在するムスリムたちにとって論争はあくまでムハンマドの子孫の

<sup>1</sup> 南アラビアのハダラーマウト地方出身者もしくはその子孫を指す。

<sup>2</sup> アラウィーもしくはムハンマドの子孫全般の特殊性がイスラームの平等の理念に反する、と主張する者たちを指す。

特殊性や平等をめぐる議論であるという認識があったという事情や、当初イルシャーディーたちの活動がイスラーム世界の指導者たちの支持を得たことを発端としたためという事情から、イルシャーディーたちは直接批判をすることができなかった。以上のことから、論争には、地域的な問題の側面と同時にムハンマドの子孫の特殊性と平等というより普遍的な問題としての側面が存在し、発生当初から論争がイスラーム世界と密接な関連を持ちムハンマドの子孫の特殊性という問題に関係したことから、後者が論争を規定する大きな影響力を持っていたといえる。そして、このような 1930 年代前半の和解の試みが同年代半ば以降に論争が沈静化した一因となったのではないか。以上のように山口は述べた。

この本報告に対して、まず本報告のコメンテーターである新井和広（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）によりコメントが述べられた。新井は、まず先行研究で放置されてきたシンガポールのアラビア語定期刊行物を一次史料として用いたことを高く評価したうえで、史料面に関してはオランダ領東インド（特にジャワ）の史料を用いていない、定期刊行物の発行者のバックグラウンドをみていない、ジャワのハドラミー・コミュニティにおける問題が中心となっていた論争がなぜ史料の発行地シンガポールで活発になったのかを明らかにしていないと指摘した。そのうえで、本報告でとりあげた時代以前にも論争があり、それに言及したうえで 1930 年代の論争を位置づける必要があることや、アラウィーとイルシャーディー双方の派閥内にハドラマウトでの部族や地縁に基づいた複雑な関係が存在したことに留意すべきこと、ハドラミー以外のムスリムの動きを捉える必要があることを述べた。そしてさらには、現地においてインドネシアナショナリストとして行動するアラブ人が増加し、それに対抗するために両派が協同したことが 1930 年代半ば以降の論争終息の原因となったことも考えるべきではないか、と指摘した。このコメントに対し、山口は、特にスラバヤとバタヴィアとの対立を中心に両派閥内には実際複雑な関係が存在していたということや、インドネシアナショナリズムに対抗するために両派が協同したことが認められるとした。そのうえで、論争へのシンガポールの関与は 1930 年代に顕著となり、その背景には 1928 年のシンガポール会議の影響などがあった、また 1930 年代半ば以降の論争終息の原因は同時代のイスラーム世界の連帯を呼びかける論調が主流となったことも考えるべきである、さらに 1930 年代における論争の特徴はアラウィーだけが“サイド”ではないという主張が前面に出ていることである、と回答した。

このような報告とコメントをふまえ、議論では非常に多くの質疑応答がなされ、主に次の 2 つの話題に議論が集中した。すなわち論争の対象者や論者、背景といった論争そのものに関する話題と、論争の発端となったアラウィーの女性と一般ムスリムとの婚姻に関する話題である。このうち論争そのものに関する話題では、例えば“サイド”ラカブの問題は対象の中心がアラブ系ムスリムとなっている以上、論争はアラブ人の枠を出ていないのではないかという疑問や、論争で問題となったラカブなどの問題が経済的利権などと関係していたか否かといった論争の背景に関する質問が出された。これらに対し、まず前者について山口が、現段階では今後の研究課題としたうえで、当時アラブ人以外のムスリムも

知識人階級は論争に関心をもっていたのではないかと回答し、後者については新井が、ラカブなどの問題は経済的には関係の無いあくまで誇りとしての問題だったが、ハドラマウトでは地位の高かった“サイド”層が移民先で経済的に富裕となることで台頭してきた非“サイド”層と対立するに至ったことが論争の背景にあると回答した。そしてこれらの質疑応答から、東南アジア地域で系譜の重要性を主張する伝統はイスラームやアラブの影響によるものではないかという考えも出された。一方、婚姻に関する議論では、当時アラウィーの女性と一般ムスリムとの婚姻事例は多数みられたのかという質問や、当時上記のような婚姻の是非について既に解釈が分かっていたのかという質問、また婚姻に関する決まりの必要性は何かといった質問が出された。これらに対して、アラウィーの女性と一般ムスリムとの婚姻は多数見られ、東南アジアだけでなく他地域でも問題となっており、当時エジプトからの改革主義の影響により婚姻の是非について既に解釈が分かっていた、またこの婚姻によって生まれた子供が非アラウィーとなることで家族・親族と階層が異なってしまうことを防ぐためとの回答があった。そして以上のような質疑応答から、婚姻に端を発した一連の論争の背景には、ハドラマミーの中にハドラマウトの社会秩序を維持しようとする人々と移民先の社会に適応しようとする人々との対立や、イスラーム指導者の仲介が特にイルシャーディーの期待に沿わなかったことの影響があったと考えられるのではないかと、さらにはそれゆえにイルシャーディーがその後論争が終息していくなかで現地人ムスリムと連携していった可能性があるのではないかと、という点にまで議論は進んでいった。

以上のような報告および議論の展開から、本報告は、20世紀初頭の東南アジアにおけるハドラマミーとイスラーム世界や現地人との関係を考えるうえで非常に興味深い事例を示しているといえる。そして、全世界的なイスラーム連帯の動きやインドネシアはじめ東南アジア地域におけるナショナリズムの動きの中で、ハドラマミーがいかに行動したかを明らかにする手がかりとなりうる報告ともいえよう。今後の研究の進展に期待したい。

